
恋の狂騒曲-クールな飼い主と猫の恋-

結城 綾

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋の狂騒曲 - クールな飼い主と猫の恋 -

【Nコード】

N4220BA

【作者名】

結城 綾

【あらすじ】

真面目一辺倒で面白味のない私、会社は倒産、恋人はなし。

一度に色んなことが起きて私は猫の格好をしてダンボールの中に入ってみた。

冗談で捨て猫になったのに、そんな私を拾ったのはいつもクールで無表情の飼い主様。

お持ち帰りされて猫として一緒に住むことに……。

1話

ズブーツ、ボタン。
ズブーツ、ボタン。

私の名前は遠野 美音子、24歳、無職。

24歳で無職ってどうかと思うけれど、勤めていた会社が倒産してしまったのだから仕方ない。

このご時勢、個人経営の会社は経営が厳しいのはありがちなことなのだから。

今は職安で失業手当をもらい、昼に就職活動をしながら夜はコンビニでアルバイト。

そんな生活がすでに4ヶ月は経過している。

まったく決まる気配のない就職活動に気持ちはふさがり、支払いが不安になってきたアパートを引き払い父子家庭の家に戻った。

3年間一人暮らしをしていた娘が戻って父は喜んでくれるだろうと思っていたのに、戻ってそうそう父の口から出た言葉に、私の方が打撃を受けてしまった。

「付き合っていた女性に子供が出来てな？ 責任を取って今度結婚しようと思っている」

「こ、子供？」

24歳で姉弟が出来る……。

しかも出来婚。

衝撃的な内容にくらりと眩暈がした。

母を病気で亡くしてから父は仕事一筋で、女性の影すらなかった
と思っていたのに、いつの間にか付き合っていた女性がいたなんて
しかもその女性は私よりたった5つ年上の20代だった。

その事実はひどく私を打ちのめした。

ズブーツ、ボタン。

ズブーツ、ボタン。

父子家庭の経済状況のことを考えて、私は高校を卒業後、就職し
た。

入社した時、すでに個人経営の会社は傾きをみせ、高年齢の社員
をリストラしたばかりで迎えたたった1人の新入社員。

仕事は8時からのはずが、職場の清掃を言い渡されたせいで朝の
6時出勤を余儀なくされ。

就業は5時だったのだけど、当然、サービス残業が待っていて8、
9時まで残業が続いた。

そんな状況な為に少しでも会社に近い場所で一人暮らしを始めた
のだけど、高卒の給料ではセキュリティのしっかりしたマンション
を選ぶことは出来ず、木造アパートが精一杯だった。

薄い壁、歩く度に軋む音。

それでも会社からは近く、自分だけのお城だった。

ズブーツ、ボタン。

ズブーツ、ボタン。

今思い返すと、思春期特有の反抗期すらなく、私は真面目一辺倒
で生きてきた。

幼い時に母を亡くし、父は仕事で忙しかった。
そんな父に我が俣を言うことすら、私には出来なかった。

ズスーッ、バタン。
ズスーッ、バタン。

彼氏は高校生の時にいたが、あっけなく他のオシャレな女の子に乗り換えた。

まあ、冗談1つ言えず、まじめな優等生の地味子より、可愛くておしゃべりが上手な楽しい子に気持ちが移ってしまうことは理解が出来る。

高校生の付き合いなんて、どれだけ楽しいかが重要なものだから。

ズスーッ、バタン。
ズスーッ、バタン。

馬鹿みたいに真面目な人生。

だからってそれで得をしたことなんてない。

24歳にもなって、今の私は無職。

血縁者の父は、若い妻と生まれてくる子供に夢中。

彼氏もいなくて、これといった趣味もない。

そんなだから、自分で自分が面白味のない人間だということもわかっている。

私だってダブーを犯してみたい。

でも犯罪は嫌だし、変なことは出来ない。

じゃあダブーって何？って考えてみると、ホントなんだろう？

いつも思考はそこで止まってしまっ。

結局、真面目な人間は真面目な思考からはみ出ないままなのだ。

ズズーツ、ボタン。

ズズーツ、ボタン。

よく、噂で真面目な人が切れると怖いと聞く。

その話は事実なのかもしれない。

だって今の私は誰が見てもこれからおかしいと思うようなことをしようとしているのだから。

ズズーツ、ボタン。

ズズーツ、ボタン。

深夜の閑静な住宅街。

だからなのか意外と背後の音が響く。

人気のない道路の端を歩きながら、私の後ろから聞こえる音の大きさに顔をしかめる。

私の容姿は一言で表すなら真っ黒。

きつと闇に解けてることだろう。

長く真っ黒で真っ直ぐな髪。

身長は152センチ。

黒いフードパーカーにデニムのショートパンツ。

黒のニーソックスに、紺スニーカー。

頭には黒猫の耳がついたカチューシャ。

ショートパンツの後ろには、黒いファアの尻尾キーホルダーの飾

りがぶら下がっている。

私にしたらこれは猫のコスプレなのだ。

街灯の下にある所定の位置に到着すると、後ろで引きずっていた洗濯機の空ダンボールを置く。

蓋を開いて中に入ろうと跨いだ所、足がまったく下につかない。踏み台に出来るような物など持ってきていなかったため、きよろきよろと辺りを見回して見るが代用できるようなものはなかった。

「えっと……」

中に入れなければこの計画の意味がない。

どうしたものかと悩んでいると、あることに気づいた。

ダンボールを横倒しにし、先に中に入り、上を押しながら体重をかけて押すと、ダンボールは横に倒れ、ちゃんと立った。

私はダンボールの中に入ったままで立ち上がり、ポケットから極太油性ペンを出すと、蓋についている羽の一面に「ひろってください」と大きな字で書く。

いわゆるダンボールに捨てられた猫の一幕を再生させたのだ。

「準備おっけー」

ペンをポケットにしまい、中に座ってダンボールの羽を閉じて蓋を閉める。

これですべての準備は整った。

私はダンボールを持つ取っ手穴から外を覗く。

計画の実行はあと数分後。

私はドキドキする胸を押さえ、ゆっくりと深呼吸をした。

2話

私かなぜ夜の道路の端に「捨て猫の一幕」を再現したのかと云えば、それは1ヶ月前に遡る。

夜コンビニでバイトをしている私は、1人のサラリーマンの姿に気づいた。

ほぼ毎日コンビニ弁当を買っていく20代後半くらいのスーツの男性。

背はスラリと高く。
わりと細身。

少しだけ癖のある柔らかかそうな黒髪。

切れ長の鋭さのある瞳。

すっと通った鼻筋。

薄い唇。

シャープなアゴ。

ちょっと言い方がどうかと自分でも思うのだけど、私的にはクルビューティーさんだと思ってる。

でも私は容姿が整っているくらいでは興味は持たない。

ある日、いつものように男性の会計をして、缶ビールを袋に入れようとした時だった。

水滴のついた缶が手からすべり、台に落ちて男性の方へ転がっていく。

それを男性は無表情であっさりと受け止めたのだ。

慌てて謝って交換を申し出たけれど、彼はそれを断った。

まあ、こういったことはごく稀ではあるものの起こることだ。でも、私の場合はそうじゃなかった。

次の日、男性の会計をしている時に、また同じことが起きた。しかし彼はまた無表情でビールを受け止め、交換を断った。

そしてまた次の日、私は2日連続の失敗に緊張し、またビールを落としてしまったのだ。

3日間連続の失敗。

もうこれは嫌がらせのなにものでもないだろう。しかし彼は、やっぱり無表情で同じ言葉を言った。

ここで普段の私なら今度こそ失敗しないように注意したと思う。でも4日目の私は、新しい母親となる人に無理やりに会わされた上に、父が少し離れたのを見計らったその女性に嫌味を言われ、めちゃめちゃ機嫌が悪かった。

そんな私は、4日目になる会計の時、自分でも信じられないけれど、わざとビールの缶を落としたのだ。

アルバイトしてお金をもらっている身で、客に対し、個人的な感情でそのようなことをするなんて愚かとしか言えない。

でも、その時の私はやったのだ。

しかし彼は無表情でビールを受け止め、私に差し出してきた。

そして、私が言うより先に、「交換は必要ない」と一言。

自宅に帰った私は自分の行動にひどく落ち込み、それから2日後に来店した彼に小さな声で前の事を謝った。

彼はそんな私に「客商売をしていれば、時に自分を抑えられない

こともある。俺は気にしていない」と言って、無表情で帰っていった。

それから私は彼と会う度、挨拶をし、軽く声をかけるようになった。

しかし、彼には何を言っても無表情のまま、言葉は「ああ」とか「そうか」「いや」とかばかり。

そのうち私は彼の表情の変化を見たいと思うようになっていった……。

そうして今、その作戦を実行すべく、私は捨て猫作戦を実行することにしたのだ。

作戦内容は、夜、帰宅する彼に私がダンボールから飛び出て驚かせるというもの。

脅かし作戦ならきつと無表情の彼も驚くことだろう。

驚いた彼を見るのが楽しみではない。

わくわくしつつつ穴から外を見てみると、しばらくして男性のシルエットが見えてきた。

姿を確認するまでじっと耐える。

心臓がばつくんばつくん音を立てて激しく鼓動し、息が少しだけ苦しくなった。

シルエットは段々と近づいてきて、それが彼だと認識出来た時、一際私の鼓動が激しく打つ。

手が微かに震えている。

こんなばかなことを考えて実行に移したのははじめてのこと。

彼を脅かしたら、脱兎のごとく逃げ出すつもりだ。

彼がすぐ側まで近づいてきた。

私は蓋に手をかけ、思いっきり押しながら立ち上がる。

「にゃにゃーん！」

ばばつと音を立てて、ダンボールから立ち上がって彼を見た。

さて、どんなふうに驚いてる？

私の視界が彼の顔に固定されるが……。

彼の表情は無表情のまま。

まったく驚いた様子もない。

あれ？

作戦の予想とは違う彼の反応に私の方が固まってしまっ。

そんな中、彼はダンボールに書かれた文字に視線を落とすと、手に持っていたジェラルミンケースを下に置くと近づいてきた。

予想外の行動に、私の方はまだ硬直したままだ。

彼は両手を私の脇に差し入れるとゆっくりと持ち上げ、私をダンボールから出す。

そして米袋か何かのように脇に抱えると、反対側の手でジェラルミンケースを持って歩き出したのだ。

な、なに？

なんで？

啞然としたまま、脇に抱えられたまま、ゆさゆさと揺られつつ彼に運ばれていく私。

え？

ちよ、ちよっと、なんで？

抵抗することも忘れ、そうして私は彼に運ばれて行ってしまったのだ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4220ba/>

恋の狂騒曲-クールな飼い主と猫の恋-

2012年1月12日02時56分発行